

神戸学院大学有瀬キャンパスの 「居場所」に関する調査報告

A survey report on the “ibasyo” (a place to stay) of students on the Arise campus at Kobe Gakuin University

糟谷 佐紀¹ 清水 寛之² 三宅 敦史³
出水 孝典⁴ 地上 博子⁵ 森田 昌美⁶
山崎 昭彦⁷ 森岡 寿昭⁸ 小川 修平⁹

(要約)

有瀬キャンパス再編整備実行ワーキンググループの活動の一環として、有瀬キャンパスの4学部(栄養、経済、人文、総合リハ)の学生を対象に「居場所」に関する質問紙調査を行い、1,395名から回答を得た。キャンパスの建物内・屋外の居場所、キャンパス内にあったら良いと思うものに対する回答から、学生が講義以外の時間にどこでどのように過ごしているのか、キャンパスをより快適な居場所とするために望む施設や設備を明らかにした。多くの学生の要求するキャンパスの諸条件が浮かび上がった。本調査の結果をもとに、キャンパスが単に修学の間というだけでなく、友人たちと集い交流する快適な場として整備されなければならないことが再認識された。

(Abstract)

We have conducted a survey using a questionnaire on the “ibasyo” (a place to stay) on Arise campus at Kobe Gakuin University to the students in the faculties of nutrition, economics, humanities & sciences, and rehabilitation. The questionnaire included items on the most comfortable place, the most desirable thing, the most dangerous place, the most desirable thing for long stay in the campus. A total of 1,395 students have filled out the questionnaire. The findings showed the several issues on campus conditions required by the many students, and the students recognized the campus as a place not only for learning and teaching but also for interaction between them.

キーワード：居場所、キャンパス整備、教育環境、大学生、個人的相互作用

Key words: “ibasyo” (a place to stay), campus renovation, educational environment, university students, personal interaction

1. 総合リハビリテーション学部
社会リハビリテーション学科

2. 人文学部 (現在の所属は心理学部)

3. 経済学部

4. 人文学部

5. 栄養学部 (2017年度末で退職)

6. 共通教育センター

7. 管財事務グループ

8. KAC 学生支援グループ

(現在の所属は経理事務グループ)

9. 管財事務グループ

(有瀬キャンパス再編整備実行ワーキンググループ)

1. はじめに

大学のキャンパスは、快適で安全・安心が十分に確保され、学生や教職員の学びや成長・発達を支える過ごしやすい空間であるべきである。神戸学院大学は1966年に開設され、2018年で53年目を迎える。その生誕の地が有瀬キャンパスであった。最初に建設された1号館は老朽化のため2011年3月に取り壊され、現在はオープンスペースになっている。今後、年を重ねるごとに、その他の学舎も改修や取り壊しなどの必要に迫られている。一方、ポートアイランドキャンパスは2007年に開設され、神戸の海に面した美しいキャンパスは在学生や受験生から好評である。こうした状況を鑑みて、2015年に「有瀬キャンパス再編プロジェクト」が組織され、最終答申が同年8月に提出された。さらに、それを受けた「有瀬キャンパス再編整備実行ワーキンググループ」が、佐藤雅美学長の諮問により組織された。このワーキンググループは、第1回（2016年10月5日）から第8回（2017年3月1日）まで計8回の討議の場を設け、2017年3月8日の総合企画会議において最終答申を報告した。本稿は、ワーキンググループの活動の一環として取り組んだ、学生を対象とした比較的大規模な意識調査の結果を取りまとめたものである。

近年、「居場所」という概念が、日本社会のさまざまな場面や集合体のなかで取り上げられている。「居場所」の本来の意味は「人のいる場所」であり、物理的空間を指し示す。しかし、建築学の分野において「物理的側面だけでなく、自己存在感・安心感を感じさせてくれる心理的側面を持つ」（杉本 2009）場所として捉えられている。居場所となる空間に対して、「環境要素が固有の居場所選択の要因になる」（山田 2005）ことや、「居場所の反復性」（山田 2006）がみられることなどが明らかにされている。社会学や教育学、心理学の分野でも、「居場所」の心理的な側面が強調されている。このことは、1980年代より不登校が急増したと深く関連していると指摘されている（石本 2009；中島・廣出・小長井 2007；田中 1992）。文部省初等中等教育局（1992）は、不登校問題への対処に関する政策提言のなかで「心の居場所」という用語を用いた。その後、「居場所」は「児童生徒が存在感を実感することができ、精神的に安心していることのできる場所」（田中 1992）や、「安らぎを覚えたり、ほっとできるところ」（矢作 2005）といった意味で用いられるようになった。つまり、現在では「居場所」は単に「人のいる場所」という物理的意味だけでなく、心理的側面が含まれるとされている（杉本・庄司 2006）。

大学生のキャンパス内の居場所に関する研究はあまり多くない。大学生の特徴である「1日の大半をキャンパスで過ごしながらもクラスルームを持たない」（久世 2007）ことが、「空き時間の行動や居場所」（渡辺 2001）に与える影響を観察する研究がみられる。渡辺は、大学生は空き時間の長さによって、キャンパス内の居場所を選択していることを明らかにした。また、居場所には①座る為、机として機能する水平面、②少人数で使用できるスケール、③日光、緑などの自然要素があること、の3要素が求められることや（林 2003）、都心や郊外などキャンパスの立地状況によって異なる学生の行動がみられること（都筑 1998；渡辺 2001）などが明らかにされている。

本稿では、こうした先行研究の知見をもとに、有瀬キャンパスにおける「居場所」に焦点を当て、今後の有瀬キャンパスのあり方の検討材料を得たいと考えている。

2. 方法

調査対象は、有瀬キャンパスの4学部（栄養学部、経済学部、人文学部、総合リハビリテーション学部（以下、総合リハ学部））の在学生（1～4年次生）と、上記4学部およびそれに関連した大学院研究科の大学院生である。ワーキンググループメンバーが担当する講義やゼミなどを通して学生に質問紙を配布、回収した。ワーキング期間内に学生の意見を収集する必要があったため、配布数や回収数の調整ができず、そのため学部によって学年や性別に若干の偏りが生じている。

調査は2016年10～11月に実施し、自由記述式の質問紙調査とした。A4用紙表面に質問と回答欄、裏面に有瀬キャンパス校舎配置図を印刷し、キャンパスをイメージしやすい工夫を行った（図1）。

質問は以下の6項目、①キャンパス内の居心地の良い場所（屋内、屋外）、②キャンパス内にあったら良いと思うもの（場所、設備、イベントなど）、③ラーニングコモンズ・ラーニングカフェについて、④図書館の活用促進に必要なもの（設備、イベントなど）、⑤キャンパス内の危険箇所、移動困難場所など（雨天時、坂道、危険箇所など）、⑥大学にもっと長く居たい、休みの日でも来たいと思う場所にするために必要なもの、で構成した。質問紙の中では「居場所」を「居心地の良い場所」と表現した。

本稿では、学生の居場所に関する項目である、①と②を中心に分析を行った。⑥は②の回答との重複が多かった。また、安全性の確保は、居場所となる場所として不可欠であるため、⑤の回答の一部を取り上げる。自由記述の内容を、各項目においてアフターコーディングを行い、定量化したデータとして集計・分析し、学部ごとの特徴を把握した。

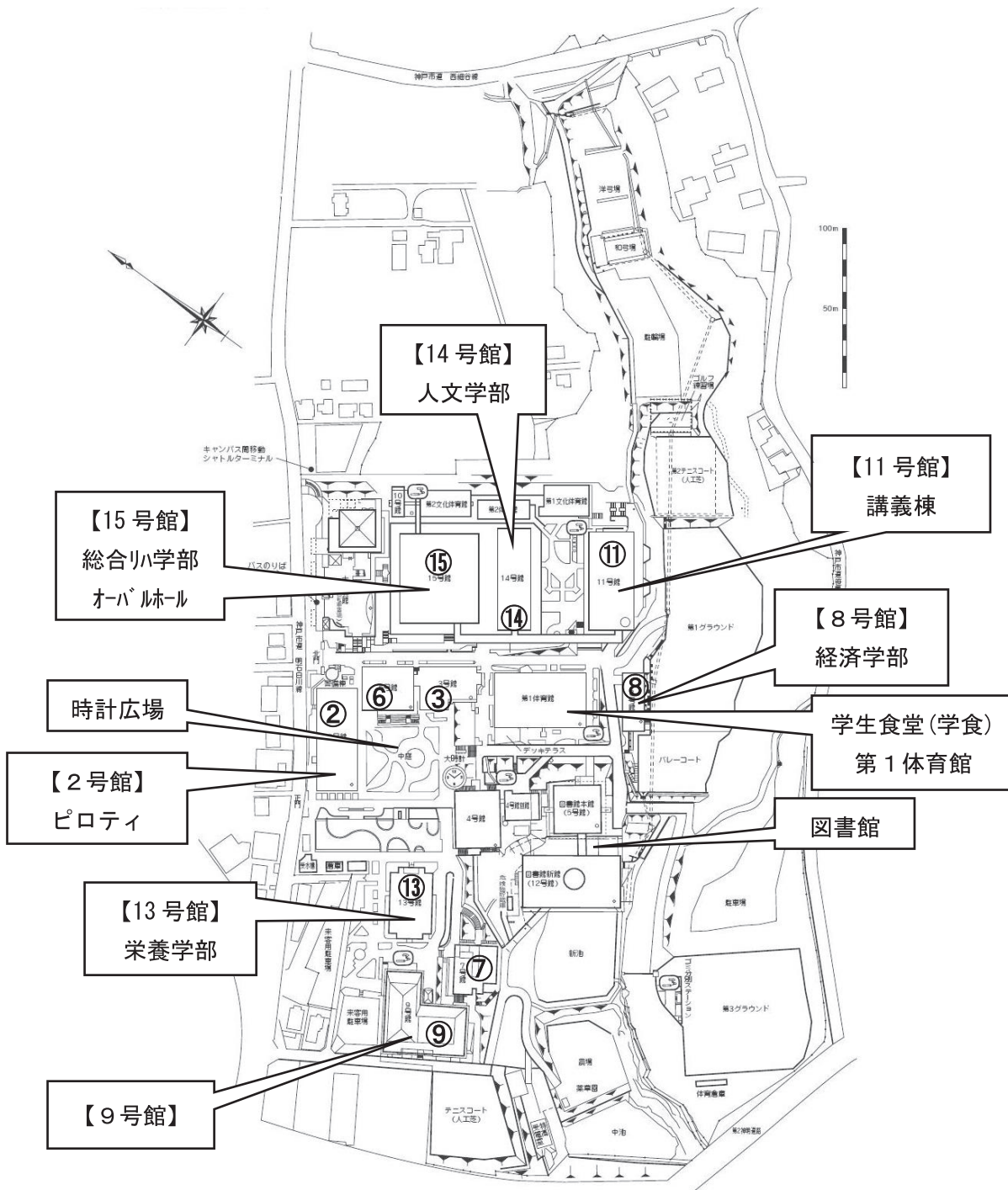


図1 有瀬キャンパス校舎配置図

注1：建物に追記した号館名や学部等は，調査実施時に記載しなかった。
 注2：学部名は，教員研究室，当該学部が主に使用する講義・演習室のあることを示す。
 注3：学部名等は，アンケート実施時点（2016年10月）のものとする。

3. 結果

(1) 回答者の概要

各学部の回答者数は（（）内は、学部在籍学生数（2016年10月1日のデータを使用）に対する回答者数の割合）、栄養学部 189名（40.3%）、経済学部 157名（10.3%）、人文学部 666名（32.1%）、総合リハ学部 383名（51.6%）の1,395名、調査時の有瀬キャンパス在籍学生 4,815名の29.0%にあたる。人文学部には人文学科と人間心理学科が、総合リハ学部には理学療法学科と作業療法学科、社会リハビリテーション学科（以下、社会リハ学科）がある。学科の回答数の内訳と学部回答者数における学科回答者数の割合は、人文学部では、人文学科 143名（21.5%）、人間心理学科 473名（71.0%）、学科名無記入 50名（7.5%）であり、回答者の7割を人間心理学科が占める。総合リハ学部は、理学療法学科 155名（40.5%）、作業療法学科 93名（24.3%）、社会リハ学科 135名（35.2%）であった。学科ごとの集計・分析を行ったが、人数のばらつきが大きいため、本稿では学部別の分析のみを取り上げ、学科の特徴がみられる内容についてのみ、学科の調査結果を用いる。

調査開始当初の質問紙には性別の記入欄がなく、最初に配布を行った栄養学部と総合リハ学部には性別不明の回答が多くなった。性別不明者は全体の19.9%（277名：栄養学部 106名、総合リハ学部 133名）であった。不明を除く回答者の男女比は、男性 39.3%、女性 40.9%とほぼ同率である（図2）。本学では男子学生が多く、全学生の62.7%を占める（2017年5月1日）。有瀬キャンパスの4学部の全在籍学生の男女比も同率である。学部別にみると、男子学生の割合は栄養学部 17.0%、経済学部 84.2%、人文学部 58.3%、総合リハ学部 62.2%であり、栄養学部のみ低い。性別のばらつきが大きいため、本稿では、性別による分析は行わない。

学年別の回答者数にも学部ごとのばらつきがみられる（図3）。全回答者の学年比率は、1年次生 30.2%（421名）、2年次生 27.7%（387名）、3年次生 27.1%（378名）、4年次生 12.7%（177名）と4年次生の割合が低く、栄養学部と経済学部において4年次生の回答はない。大学院生 1名、学年の記載のなかった者 31名である。学年による分析も、本稿では行わない。

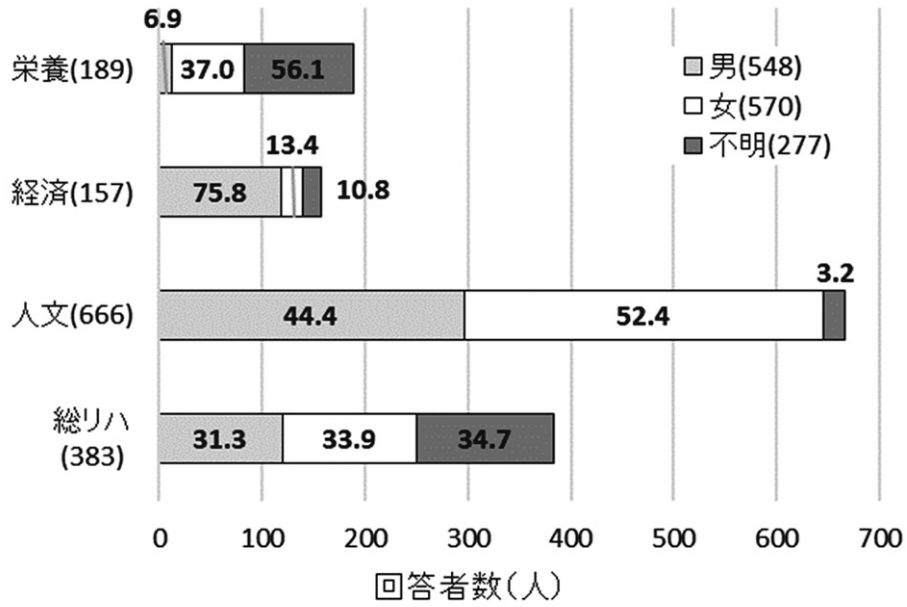


図2 学部別 回答者数(人)と男女比率(%)

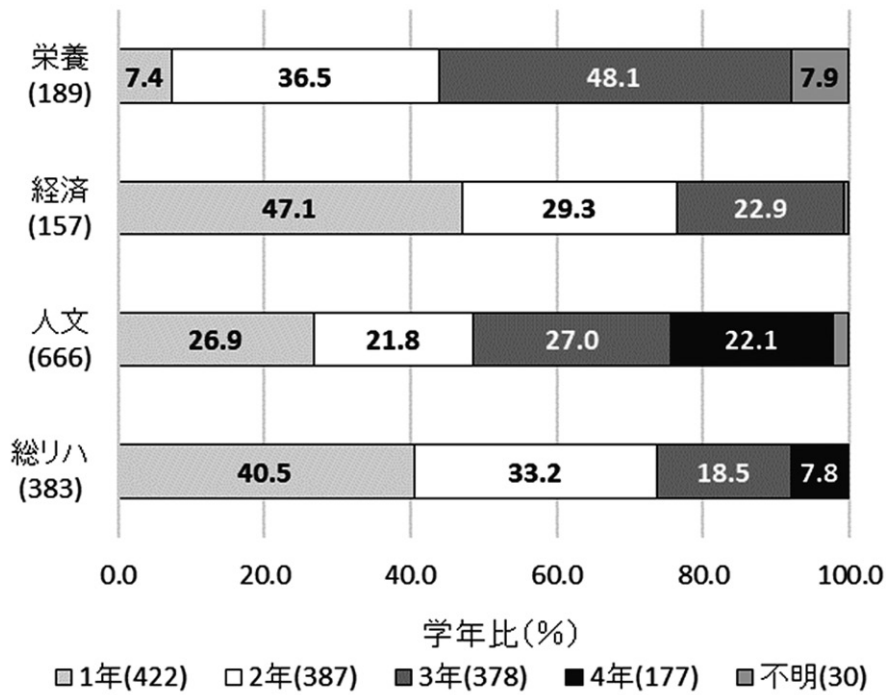


図3 学部別 回答者の学年比率(%)

(2) 建物内における学生の居場所

建物内における学生の居場所について回答した者は1,141名で、全体の81.8%であった。残りの18.2%は「特になし」、もしくは無記入であった。

全体の回答を示す(図4)。図書館を居場所と回答した者が最も多く295名(21.1%)であった。次いで大学会館170名(12.2%),14号館135名(9.7%),オーバルホール133名(9.5%)であった。人文学部の回答者数が多いため、実数での学部の特徴把握は難しいが、各建物の利用学部の特徴はみられる。14号館を居場所と回答した者の90.4%が人文学部、9号館の88.0%は栄養学部であり、オーバルホールと回答した者は総合リハ学部のみで、他学部の学生はいなかった。オーバルホールは、15号館3階にあるエントランスホールで、バス停から11、14号館へと移動する動線の途中にある全面ガラス張りの広い空間である。可動式の机と椅子があり、学生は勉強や食事などに利用している。バス停からみえるオーバル(楕円)に張り出した部分にある小さな舞台では、演奏会や講演会が開催されることもあり、多くの学生がこの空間を認識している(ただし、この名称を知る学生は少ない)。

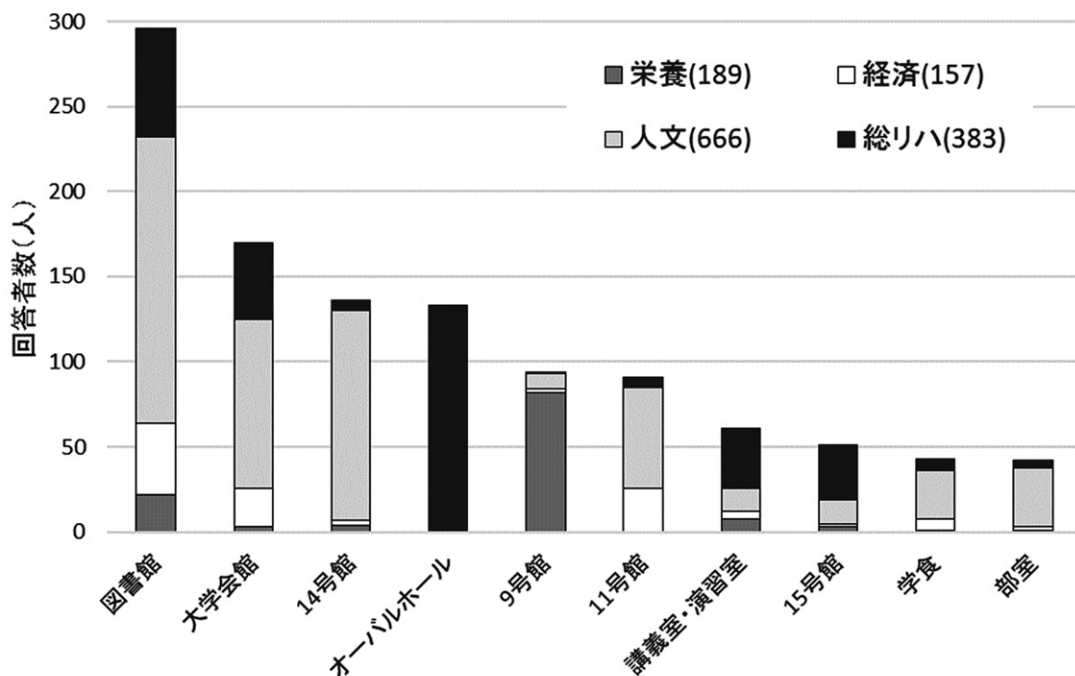


図4 建物内における居場所(人)

次に、全回答者数に対する各項目の回答者数の割合を学部別にみる（図5）。概観すると、各学部が主に使用する講義・演習室に近い場所を居場所としている者が多いことは明らかである。栄養学部では9号館、経済学部と人文学部においては図書館、総合リハ学部ではオーバルホールが、それぞれの主な居場所となっている。学部ごとに詳細をみる。

栄養学部の43.4%が9号館を居場所に挙げた（ $X^2 = 467.71$, $df=3$, $p < .001$ ）。栄養学部が使用する7号館、13号館と9号館は近く、7、13号館内に広いスペースがないこともあり、9号館を居場所としている学生が多いことがわかる。2012、2013年度に9号館3、4階の女子トイレの改修が行われた。さらに調査後の2017年3月に、3階の談話室の机と椅子のリニューアル、HALF TIME（食堂・9号館3階）の改装などが行われ、環境は改善されている。

経済学部では、26.8%が図書館と回答し、次いで11号館（16.6%）（ $X^2 = 60.52$, $df=3$, $p < .001$ ）、大学会館3階（14.6%）を挙げた。経済学部の教員研究室は8号館にあるが、そこに学生が滞在できる場所はないため、8号館に近い図書館、11号館を利用していると考えられる。4学部の内、学部のテリトリーとなる場所がみられないのが経済学部であった。

人文学部では、図書館（25.1%）、次いで14号館（18.3%）（ $X^2 = 110.17$, $df=3$, $p < .001$ ）、大学会館（14.9%）を挙げる学生が多かった。人間心理学科の教員研究室や実習室のある14号館を選択した学生が多い。14号館は、1階と3階、5階にロビーやラウンジというスペースがあり、そこを利用していると考えられる。人文学部を人文学科と人間心理学科に分けてみると、人文学科の学生が図書館を挙げた割合は35.7%と全学部・学科の中で最も多い。一方、人間心理学科の学生は、14号館と図書館をほぼ同じ割合で選択していた。実習室などを多く利用する人間心理学科の学生は14号館に自分の居場所があるが、それが少ない人文学科は、特定の場所ではなく図書館を選択していると考えられる。

総合リハ学部をみる。学部全体では、15号館3階のオーバルホールと回答した学生が多い（34.5%）（ $X^2 = 380.46$, $df=3$, $p < .001$ ）。次いで図書館（16.7%）、大学会館3階（11.7%）と続く。学科別にみると、その状況は少し異なる。理学療法学科の学生は、オーバルホールの利用が半数以上（54.2%）ある。作業療法学科では、オーバルホール（33.3%）と15号館（22.6%）と分かれるが、「オーバルホール」という名称を知らないために、「15号館」と回答している可能性は高い。一方、社会リハ学科では、大学会館を挙げた者が最も多く（24.4%）、次いで図書館（20.7%）、講義室・演習室（16.3%）であった。同じ15号館を拠点とする学部でも、学科によってテリトリーは異なるようである。社会リハ学科には、1年次から4年次までの基礎・専門ゼミナールで使用する演習室が、各教員研究室と廊下の間にある（教員は、廊下から演習室を通過して、自身の研究室に入る）。演習室は、他学年が演習で使用していない時は自由に利用でき、空き時間の自習や昼食などに利用する学生もある。しかし、今回の調査では演習室を居場所と回答した者は少なく、設計時に意図したようには使用されていないことがわかった。国家試験の学習スペースとして、国家試験前には4年次生が終日利用している。教員不在時には開錠されず、常に開いている部屋ではないことが、利用の少ない要因の1つと考えられる。

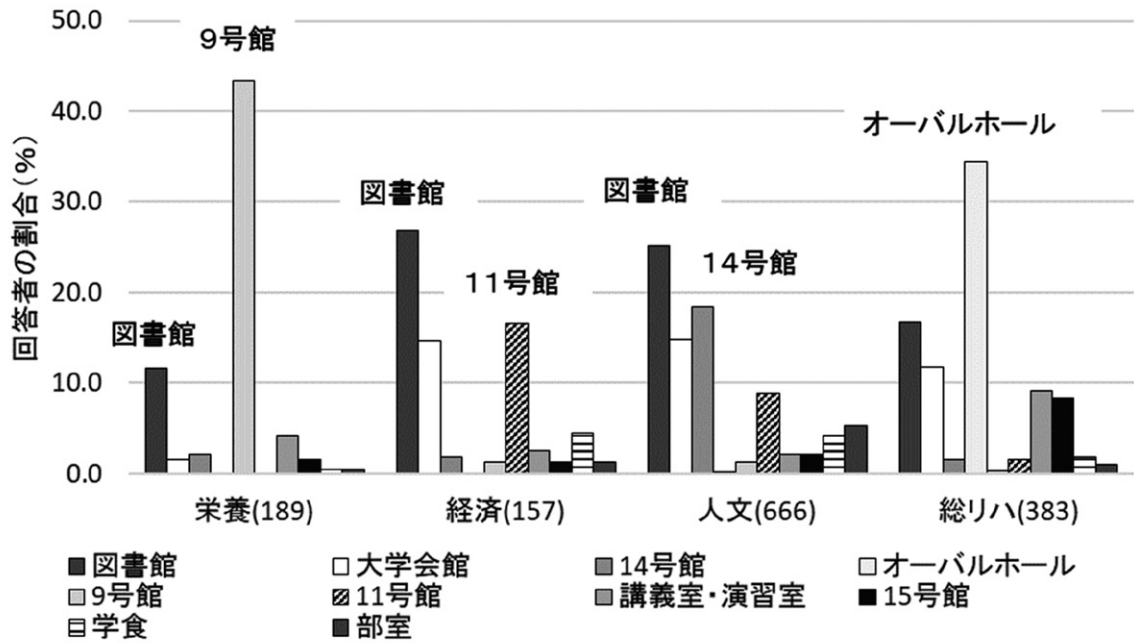


図5 学部別 建物内の居場所 (%)

回答数としては少なかったが、居場所としてトイレを挙げた学生が、全体の23名(1.7%)存在した。トイレを挙げた学生の内訳を学部別にみると、栄養学部3名、経済学部2名、人文学部12名、総合リハ学部6名であった。学年では、1・2年次生が6名ずつ、3年次生は9名、4年次生は2名であった。性別では、男子学生9名、女子学生11名、不明3名と、女子学生が少し多かった。

知人・友人が少ないためにトイレを居場所と回答した学生が多いのか、トイレにパウダースペースなどが設置され(9号館3,4階,11号館2,3階,6号館2,3階)、快適な環境と感じる学生が多いのか、今回の調査結果から判断することは困難である。前者であれば、10年ほど前よりメディア等で取り上げられるようになった、大学の食堂の壁に向かって(または隣との仕切りがあって)一人で食事のとれる「ぼっち席」や、トイレで昼食をとる大学生の「便所飯」のような事態を心配する必要がある(二宮 2010)。人との関わりを避け、もしくは人とうまく関ることができないという理由で「トイレが居場所」と考える学生が本学にも存在する可能性は否定できない。

(3) 屋外における学生の居場所

ここからは、屋外の居場所に対する回答をみる。この項目に対して「特になし」、もしくは無記入の回答は53.6%と半数を超えた。建物内と比べ、屋外には居場所がない、もしくは関心が低いことがわかる。調査実施時期が、10～11月の気温が下がり始めていた時期であることが影響した可能性もある。

全体の結果をみると、時計広場（大時計のある中庭）を挙げた者が329名（23.6%）と最も多く（ $X^2 = 44.70$, $df=3$, $p < .001$ ）、次いでベンチ6.6%であった（ $X^2 = 22.58$, $df=3$, $p < .001$ ）（図6）。ベンチについては設置場所を明記した回答はなかったが、時計広場をはじめ、15号館と14号館の間の広場、バス停前などのベンチを指すと考えられる。「時計広場」という名称で回答した学生が多く、中庭を学生の多くが「時計広場」と呼んでいることが調査によりわかった。2号館ピロティは、2号館1階の2か所のピロティの内、9号館側のテーブルとベンチが設置されている場所を指すと推察する。屋外のため冬は寒い、ピロティであるため日差しや雨を避けることができ、季節を問わず、昼食をとったり、友人同士談笑したりする様子が見られる。

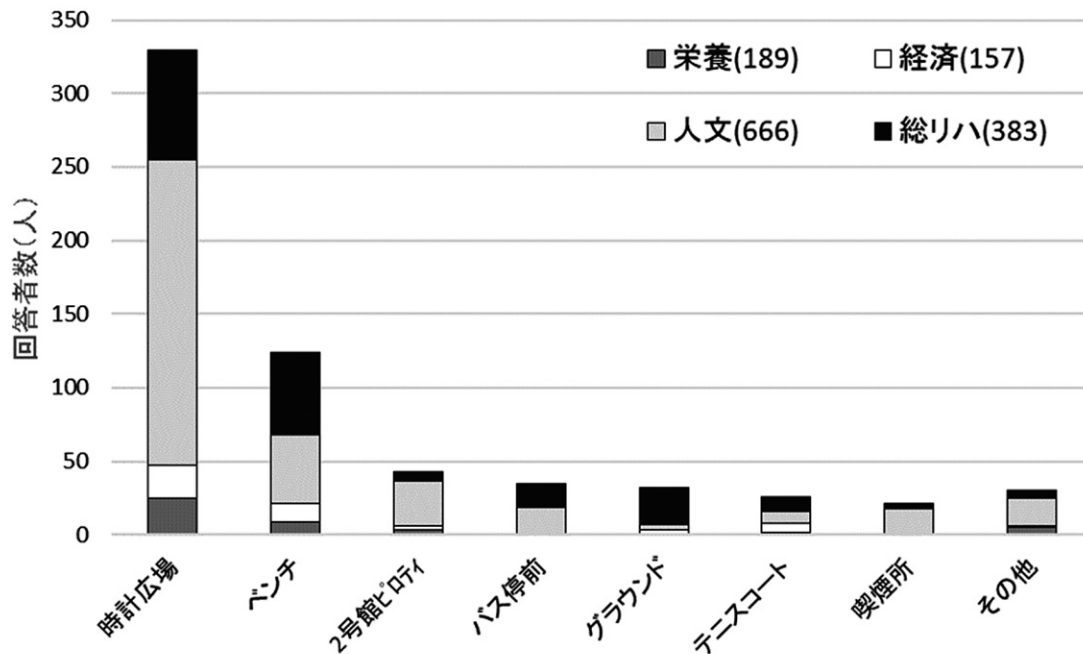


図6 屋外における学生の居場所（人）

どの学部においてもキャンパスのほぼ中央に中心に位置し、バス停にも近い時計広場を居場所とする者の割合が多く、特に人文学部においてその割合が高い（31.2%）（図7）。しかし、調査結果だけでは理由の特定は困難である。総合リハ学部は、他学部と比較するとベンチと回答した者が多い。総合リハ学部の授業の多くは、15号館1階の講義室で行われるため、15号館と14号館の間のベンチを学生が利用している様子がよく見られる。総合リハ学部の回答のベンチはその場所を指すと推察される。また、社会リハ学科の学生の時計広場との回答が、他の2学科と比べ多かった（社会リハ31.1%、理学療法・作業療法12.9%）。理学療法学科、作業療法学科では国家試験取得に関連する科目が多く、授業の空き時間が少ないのではないかと考える。

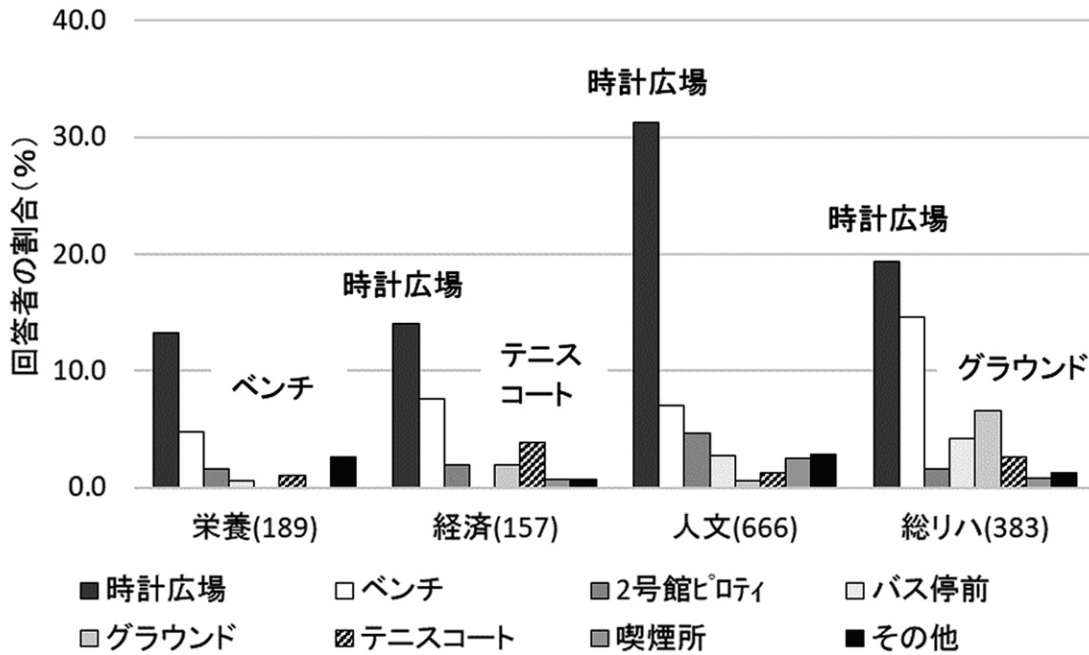


図7 学部別 屋外における居場所 (%)

(4) キャンパス内に学生が希望するもの

キャンパス内にあったらよいと思うものを尋ねた(図8)。複数回答も多いが全回答数は1,156回答と学生の関心は高い。

カフェなど飲食店を希望する声が圧倒的に多い。カフェ 268名(19.2%) ($X^2 = 17.03$, $df=3$, $p < .01$), 飲食店 137名(9.8%) ($X^2 = 83.90$, $df=3$, $p < .001$), スターバックス 121名(8.7%) ($X^2 = 2.82$, $df=3$, n.s.), ファーストフード店 107名(7.7%) ($X^2 = 16.10$, $df=3$, $p < .01$)と、食事をとる目的ではなく、自習や談笑など多目的に利用できる場所を求めている。ポートアイランドキャンパスを知る学生が多いようで、「ポートアイランドのような」という記載が多くみられた。ポートアイランドキャンパスでは、昼休みに学生が食事できないほど混雑するという苦情も聞く。しかし、その時間を除けば食事をしなくても喫茶利用として、もしくは何も飲食しなくても自習や談笑できる場所は多く、友人、または一人で過ごすことができる。近年、日常的にカフェを利用する学生は多く、同じような場所をキャンパス内に望んでいると推察する。有瀬キャンパスでは、昼食時以外に食事以外の目的で、食堂を利用する学生をほとんど見かけない。授業の空き時間が少ないのか、空き時間には図書館等へ移動するのか、学生行動の把握はできていない。一方、建物内における居場所として多くの学生が挙げた図書館には、飲食スペースは少なく(入口手前の一部のみ)、友人と談笑できない。オーバルホールは、総合リハ学部の学生の利用は多いが、自動販売機が近くに1台あるのみで(2016年4月に設置)、多くの学生は学内外のコンビニエンスストアなどで購入したものを食べている。他大学やポートアイランドキャンパスにおいてよく目にする、食堂から食事をトレイにのせて運んでくる学生を有瀬キャンパス

ではほとんど見かけない。

カフェに次いで多かったのは Wi-Fi 環境であり、190 名（13.6%）の回答があった（ $X^2 = 40.32, df=3, p < .001$ ）。調査後に（2017 年度）拡張工事がなされ、Wi-Fi 環境は学内に増えている（学内ネットワークを経由しない公衆無線 LAN「フリー無線 LAN スポット」として新たに整備¹）。

その他、トイレに関する希望も多くあがった。トイレに関しては、古いものから随時リニューアルが進められている。ただ、学生の回答には、エアタオルや便座シートや除菌液などの設備に対する要望もあった。これらの設備は大学以外の場所（駅や店舗など）に多く設置されるようになり、同様の設備が学内にないことを不満に感じる学生が多いようである。

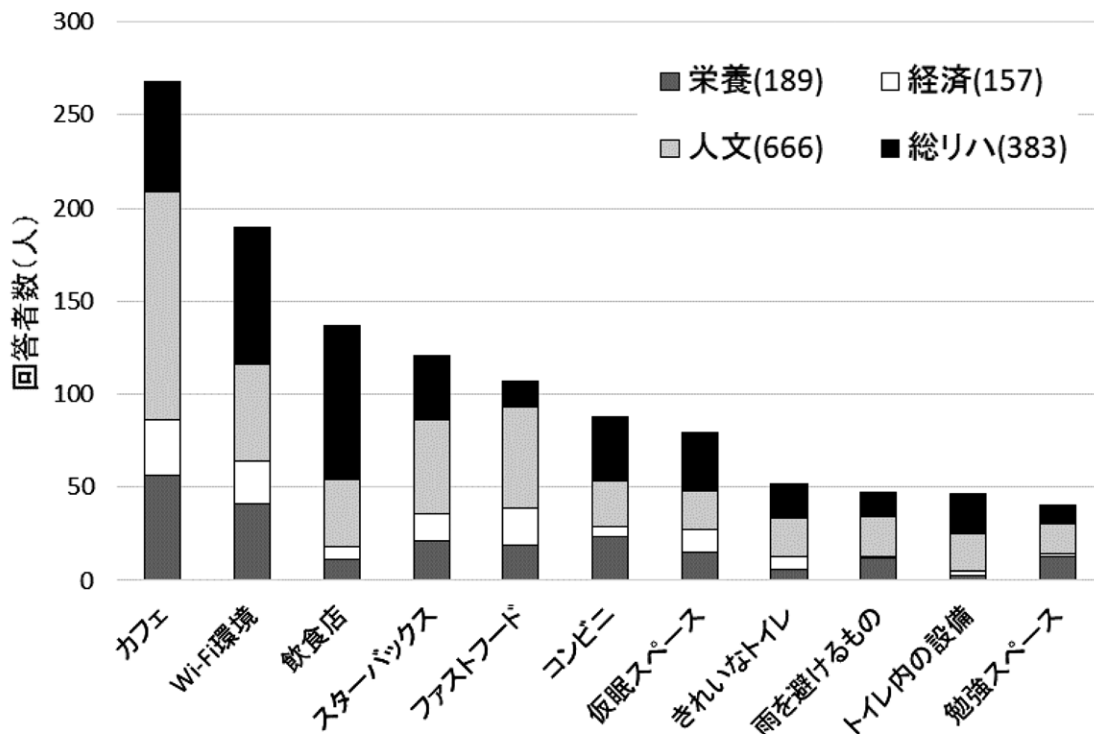


図8 キャンパス内にあつたらよいと思うもの (人)

学部別にみる（図9）。栄養と経済、人文学部においてカフェが、総合リハ学部において飲食店が多い。自由記述のため、カフェと飲食店の明確な区別はできないため、どの学部もカフェ・飲食店を希望していると言える。栄養学部と総合リハ学部は、Wi-Fi 環境への希望も多い。国家試験取得に向けて夜遅くまで勉強する学生が多いこともあり、飲食しながら勉強、友人との談笑できる場所を求めている。

その他、学生が希望するものについて着目すべき点を3点挙げる。1つ目は、仮眠スペースに対する要望である。これは栄養学部（7.9%）、経済学部（7.6%）、総合リハ学部（8.1%）に多かった。大学の授業数が多く、夜間のアルバイトをせざるを得ない事情や、時間割の

組み方によって空き時間が多く出てしまう時などに、講義室やオープンスペースではなく仮眠スペースとして睡眠できる場所を求めている。遠方から通う学生などは、「定期試験中は通学時間をもったいないので大学に泊まりたい」という要望もあった。「個室で勉強したい」「個室で仮眠をとりたい」という声もあった。

2つ目は、通学に関して学内の駐車スペースと、9号館近くの駐輪場（栄養学部）の要望である。栄養学部の学生から、9号館近くの駐輪場、夜間（20時以降）の出入り口の設置など、利便性を高めてほしいという声があった。夜まで勉強して9号館から駐輪場までの移動ルートは暗く、栄養学部は女子学生が多いため不安であると推察する。

3点目として、夜間や休日の大学の利便性の向上を求める声である。日曜日の図書館開館（2016年度からは日・祝開館日は増えている）と、食堂やコンビニエンスストアの営業を望む声がある。食堂やコンビニエンスストアの夜間営業に対する希望もあった。特に放課後も長時間にわたり学内で勉強したいという学生（栄養学部や総合リハ学部が多い）からは、「夜間の学内利用を認めてほしい」「勉強中かつ勉強したいと思っているのに21時に帰宅を強いられる」と、21時以降の学内利用ができないことに対する不満がみられた。現在は、警備員が学生に対し時間内に退出するように声をかけている。これを追い立てられるように感じている学生もあった。退出時間の数分前から学内放送により退出時間を知らせるなど、スムーズな退出、警備員への対応に不満を持たないような対応が必要である。また、定期試験前や国家試験前の夜間退出時間の延長について、学生の安全性確保が最優先であるが、大学で勉強したいという学生の希望も叶えることも必要であると考え。回答の中には、「大学に長く居たくない」「休日に大学に来る必要がない・来ない」という回答も少なからずみられ、学生間の意識の違いがみられた。

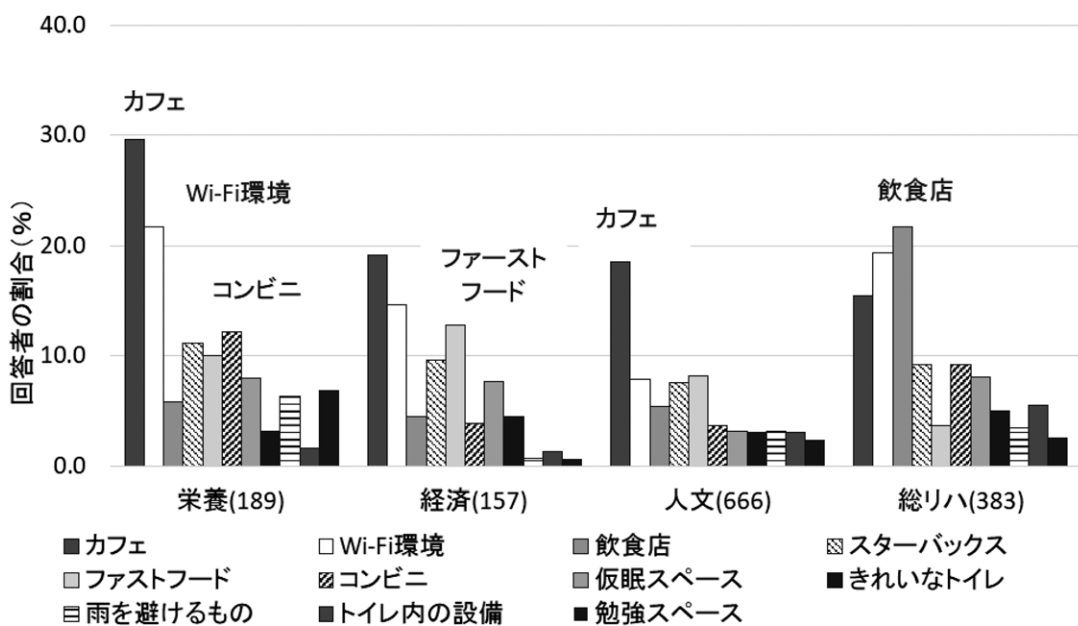


図9 キャンパス内にあったらよいと思うもの

(5) キャンパス内の危険箇所、移動困難場所

学生の居場所とは直接関係のない内容にみえるが、学内の危険箇所や移動が困難な場所の改善は、学生の居場所を増やすことにつながると考え、本項目にも触れる。質問紙設計時には、この設問に対し多くの回答を期待していなかった。しかし、雨天時に危険である場所などについて多くの学生から回答があり、日常的に意識していることがわかった。特に有瀬キャンパスは、斜面地に立地しているため、キャンパス内に勾配のきつい坂道や、階段しか移動手段のない場所などが多い。学生からは、雨天時にバス停前のタイル敷設部分や階段が滑りやすく、自身が滑った、もしくは転倒した人を見たという意見が多く上がった。喫煙所が危険箇所として挙げられているのは、夜間暗い場所であるからか、明確な理由は不明である。

栄養学部の学生からは、有瀬橋のバス停近くに歩道橋と信号機を設置してほしいという回答を多く得た。有瀬橋のバス停が9号館や13号館に近く、そこを利用する学生（共通教育科目受講の1年次生、もしくは栄養学部）の利用が多い。しかし信号機がなく、朝は車の交通量も多いため、かなり注意しながら走って横断する学生が多い。危険な目に遭った、もしくは遭う様子を見た学生が多いと推察する。

危険箇所については、教職員が把握しにくいことも多く、学生の意見を参考にすることは有効な手段である。特に夜間利用の多い運動部に所属する学生や、資格試験に向けて勉強する学生などの声を拾う必要があると考える。

4. まとめ

本報告は、神戸学院大学の有瀬キャンパスで学ぶ約1,400名の学生に対して、キャンパス内の「居場所」に関する質問紙調査を実施した結果をまとめたものである。調査の結果、全体として、学部別にキャンパス内の特定の場所が学生にとって主な居心地の良い空間であることが明らかになった。これらの調査結果から、キャンパスが単に修学の場というだけでなく、友人たちと集い交流する快適な場として整備されなければならないことが再認識された。中には、修学の場であることを軽んじる意見もあったが、学生時代に多くの友人と時間を共有することは重要である。それがキャンパス内で多く行われることは、教職員にとっても喜ばしいことである。

近年、キャンパスで過ごす学生が減少しているという声をよく聞く。アルバイトや家庭の都合で、授業終了後すぐに帰宅する学生も多い。しかし、今回の調査結果から、学生の多くは、キャンパスを自分たちの居場所として強く意識し、滞在時間をより快適に過ごしたいという強い要望を持っていることが明らかになった。大学が、すべての要望に応えることは不可能であるが、なるべく学生の要望に応え、学生にとって居心地の良い場所で勉学に励み、友人との交流を図ることができるよう、教職員ともにさらに取り組んでいく必要がある。質問紙に多くの意見を書き込んだ学生も少なくなく、示唆に富んだ意見、ぜひ実現したいと思う内容も多かった。

学部や学科，学年，性別によって，明確ではないが学生自身は認識しているテリトリーが存在することが分かった。そのテリトリーに入れない者，入りたくない者にとっての居場所もあるように感じた（図書館など）。学生は複数の居場所を持ち，その時のメンバーや目的（勉強，談笑，時間つぶしなど）によって，居場所を選択している。しかし，その選択肢が少ない学部もある。ゼミ室のない学部の試験勉強には，空き教室を勉強スペースとして開放することを提案したい。また談笑の場の少なさは，多くの学生にとって不満要素となっており，それが授業終了後にすぐ帰宅する理由の一つでもあると推察する。学生が自由に使える場所，8号館の空き研究室を学生のゼミ室や自習室として開放するなど，ポートアイランドキャンパスよりも学生数が少なく，利用されなくなった講義室などがある有瀬キャンパスだからこそできることを提案したい。

有瀬キャンパスは，これから大規模改修や建替えの時期を迎える。これまで幾度となくキャンパスの総合計画，プロジェクトが検討され，そのすべてではないが実現してきた。しかし，その時に在学生の声を詳細に把握できていたかについては疑問である。今回の調査は，十分な時間をかけることなく実施してしまったが，学生たちは，大まかな質問に対し真剣に答えてくれた。この声を無駄にしてはならない。そして，今後さらに具体的な計画が挙がる際には，学生の意見を把握できる調査を実施し，その意見を反映させることを検討していく必要がある。すでに本学では，新入生アンケートなどで利用しているインターネットアンケートの経験と技術がある。スマートフォン等で回答できる，あまり設問数の多くないアンケート調査であれば，全在籍学生からの意見を収集することは容易である。そしてその中から，直接意見を言いたい，もしくはこの学生に直接意見を聞きたいという学生を集め，学生と教職員とが意見や情報を交換できる場を設け，具体的な案件に取り組むことが望ましいと考える。学生がキャンパス内に居場所を持ち，授業以外の時間もキャンパス内で過ごせるような居心地の良い空間を提供することは，大学の責務であると考えられる。

注

- 1 新たに Wi-Fi 環境が整備された箇所は，次の通りである。①第1体育館 地階 学生食堂；②6号館 1階 玄関ホール，5階 自習室；③9号館 1・2・4～6階 ロビー，3階 HALF TIME；④11号館 1階 談話室・ミーティングルーム，2～4・7～9階 ロビー；⑤13号館 1階 玄関ホール；⑥14号館 1階 エントランスホール，3階 ロビー・情報コーナー；⑦15号館 1階 エントランスホール

参考文献

- [1] 石本雄真 (2009), 「居場所概念の普及およびその研究と課題」, 『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』, 3, 93-100.
- [2] 久世雄太・境野奈津子・柳澤要, (2007), 「大学施設における学生の余暇の居場所に関する研究」, 『日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州)』, 451-452.
- [3] 杉本希映・庄司一子 (2006), 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化」, 『教育心理学研究』, 54, 289-299.
- [4] 杉本範子・大原一興・藤岡泰寛, (2009), 「小舎制児童養護施設における改築による子ども達の居場所と交流への影響」『日本建築学会計画系論文集』, 第74巻, 第645号, 2339-2345.

- [5] 田中智雄 (1992), 「登校拒否 (不登校) 問題について: 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して (学校不適応対策調査研究協力者会議報告)」『教育委員会月報, 44 (2), 25-29.
- [6] 都筑学 (1998) 「キャンパスにおける大学生の居場所: 郊外型のマンモス私大における分析」『日本青年心理学会大会発表論文集』(6), 36-37.
- [7] 中島喜代子・廣出 円・小長井明美 (2007), 「「居場所」概念の検討」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 58, 77-97.
- [8] 二宮 祐 (2010). 「便所飯」に関する一考察 - 大学における心理主義 - 『一橋大学大学教育研究開発センター年報』, 63-71.
- [9] 林久順・金子雅人・永峰麻衣子・山本圭介, (2003), 「学生のキャンパス内における居場所獲得様態に関する考察」, 『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海)』, 103-104.
- [10] 樋野公宏・石井義光, (2014), 「高齢者における居場所の利用実態と意義」『日本建築学会計画系論文集』, 第79巻, 第705号, 2471 - 2477.
- [11] 山田あすか・上野淳, (2005), 「痴呆性高齢者グループホームの環境及び入居者の固有の居場所とその変容に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』, 第592号, 93-100.
- [12] 矢作博美 (2005), 「子ども・若者における「居場所」に関する研究の概観」, 『聖マリアンナ医学研究誌』, 5, 121-126.
- [13] 文部省初等中等教育局 (1992), 「学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否 (不登校) 問題について: 児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して」
- [14] 渡辺久仁子・大月敏雄・安武敦子, (2001), 「都心型大学キャンパスにおける学生の居場所と行動に関する研究」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東)』, 727-728.